



小路にかけられた役行者山の提灯

筆者は、平成23年7月15日、梅雨が明けた直後の煮えくり返るような暑いなか、『祇園祭』の山鉦群を訪ねました。『役行者山』と称する山があると知り(今回の原稿を書くまでは知らなかったですね)、その山を見るためです。その山は、四条界隈に並んだ山鉦群の中の最北端に位置し、訪ねあてた小路の中にありました。『役行者山』と書かれた提灯がその小路の上に誇らしげに飾ってありました。通りを左に折れると、やや小振りながら堂々とした山が見えてきました。残念ながら水引や懸物などの飾りつけは外してありましたが、傍の町屋に入ると、懸物等の飾りと共に、左右に一語主神、葛城神を従えたご神体である『神変大菩薩役行者』が祀られていました。山の説明板に「役行者山は応仁の乱以前からの昇山で、ご神体(人形)は修験道の開祖、役小角、尊称「神変大菩薩役行者」と一語主神、葛



役行者山を正面から眺めたところ

が如し。體萬丈に踞り飛ぶこと翫鳳の如し。晝は皇命に隨ひて嶋に居て行ひ、夜は駿河の富峯の嶺(富士山)に往きて修す。然して斧鉞の誅を宥されて朝の邊に近づかんことを庶ふが故に、殺劔の刃に伏して富峯に上る。斯かる嶼に放たれて憂吟の間三年に至る。是に於いて慈の音に乗り、太寶元年歲次辛丑正月天朝の邊に近づき、遂に仙と作りて天に飛ぶ。吾が聖朝の人道照法師、勅を奉じて法を求めて大唐に往く。法師五百の虎の請を受けて新羅に至り、其の山中に有りて法花經を講ず。時に虎衆の中に人有り。倭語を以て問を挙げたり。法師、「誰ぞ」と問ふ。「役の優婆塞」と答ふ。法師、之を我が國の聖人なりと思ひ、高座より下りて之を求むるに無し。彼の一語主大神は役の行者に咒縛せられて今に至るまで解脱せず。其の奇表を示すこと多数にして繁きが故に略するのみ。諒に佛法験術の廣大なることを知る。帰依する者は必ず證得せんと、役小角の生誕から、成人後の修行する姿、一語主大神との関係、伊豆流島の話、その後の話などが、若干の誇張もありますが分かりやすく語られています。講談社学術文庫では分かりやすく翻訳されていますが、漢文読み下しのほうが格調を感じます。

城神の三神で、役行者が一語主神を使って葛城山と大峰山の間を橋を架けさせたという伝承を想起させる。正面に役行者が帽子を被り袈裟・掛絡を纏い、経巻・錫杖を手に祠に座し、葛城神は女神で手に輪宝を、一語主神は鬼形で赤熊を被り斧を携える。(途中、水引、前懸、胴懸等の説明が続く)。宵山の7月16日には本山修験宗総本山聖護院による護摩焚きが行われると書かれており、「こんな所まで役行者信仰が浸透しているのだ」と驚きました。修験道の開祖として祀られる役行者の面目躍如たるものがあり、来年は、7月16日の午後2時(頃から始まる)の護摩焚きの場に絶対居合わせたいと思いつつながら、この山を後にしました。

参考文献 中田 祝夫 『日本霊異記(上)』 講談社学術文庫 1978



左右に一語主神、葛城神を従えた神変大菩薩役行者

# 漫浪とさるふ

第62回 葛城 ⑩

前回は、飛鳥時代から藤原京の時代にかけて活躍した役小角、通称「役小角」と呼ばれる謎の人物が正史(続日本紀)に記されていた内容を紹介しました。今回は、役小角の超人的な面と修験道の開祖として祀られる2つの側面について訪ねてみましょう。

前回は、「役小角は文武天皇3年5月24日に伊豆の島に流された。初め、葛木山に住んで呪術をもって外従五位下韓國連廣足の師を称していたが、後にその能力を失い、讒り、妖を以て惑わすようになった。それで伊豆に遠島となったのである。鬼神を使役して水を汲み、薪を採らせ、もし鬼神が命に従わないと即ち咒をもつて鬼神を縛つたものだ」と、世間では噂していた」と『続日本紀』に記された内容を紹介しました。役小角について公的に残されている話はこれ位で、「何だ、それだけか」と思われるかも知れません。しかし、役小角に関しては他にも詳しく記された書物があるのです。それが、通称『日本霊異記』(正式名称は『日本國現報善悪霊異記』で、奈良時代後期から平安初期に生きた薬師寺の僧景戒がまとめた)とされる)として知られた日本で最初の仏教説話集で、仏教の教えを分かりやすく具体的に示すエピソードをまとめたものです。中には創作と思われるような話もありますが、役小角に関する記載は荒唐無稽な話ばかりとはいえない面もあるようです。

【日本霊異記】上巻第28話に「孔雀王の咒法を修侍し、異しき験力を得て、現に仙と作りて天に飛ぶ縁」と題して、(役の優婆塞は賀茂役公、今の高賀茂の朝臣といふ者なり。大和の國、葛木の上の郡茅原の村の人なり。生知あり博學一を得。三寶を仰信して之を以て業と為す。毎に五色の雲に挂りて冲虚の外に飛び、仙宮の寶と携はり、億載の庭に遊び藥蓋の苑に臥伏し、養性の氣を吸嗽することを庶ふ。所以に、晩年四十餘歳を以て、更に巖窟に居り葛を被り松を餌とし、清水の泉を沐び欲界の垢を濯ぎ、孔雀の咒法を修習し奇異の験術を證得したり。鬼神を驅使し之を得ること自在なり。諸鬼神を唱びて之に催して曰く「大倭國金峯と葛木峯とに椅を度して通せ」と。是に於いて神等皆愁ふ。藤原宮御宇天皇(文武天皇)の世、葛木峯、一語主大神、之を託護して曰く「役の優婆塞、謀りて將に天皇を傾けんとす」と。天皇之に勅して使を遣はして之を捉へんとするに、猶ほ験力に因りて輒く捕へられざるが故に、其の母を捉ふる。優婆塞母を免れしむるが故に、出で来て捕へらる。即ち之を伊圖の嶋に流す。時に身を海上に浮かべて走ること陸を履む